

## 言語學上より見たる「シラス」と「ウシハク」

白 鳥 庫 吉

私は前には支那の知縣知事等や蒙古語のメデ Mede の如く我「シラス」の語も亦「知る」より「支配する」意味を生ずるに至つたものならんと想ふたが、其後翻て再考し特に安藤正次君の高見を甚だ面白く感ぜし暗示を得たる尠からざる結果、更に下の如く考ふるに至つた。

安藤君はシラス Shirasu シン Shizu シム Shimu の三語を同源とせられたが、此説は實に肯定し得べき正説であらう。而し此三語に共通なるシ Shiz は重要な語根にして、ラヌ Ransu クムム Mum は單に接尾語 (Suffix) に過ぎないことは此三語を比較對照すれば自ら明であらう。私はこれによりて今やシラスの語根「シ」は抽象的の「知る」の義にあらずして、具體的の「占む」「敷く」の「シ」と同意なるを主張するものである。而して此「シ」は其居所を占め從て之を所有し支配するの義をも含むに到ることは勿論である。猶ほ之を傍證すべき適例はス(巢)といふ語である。これは鳥等の占め敷き領有支配する場所の義にして、「シラス」といふ動詞の語根シと同意味の名詞にして、唯々 Shi と Su との如く母音 I と U とを異にするばかりである。然るに我邦語に於て母音のみ變じて其語の同一なる例は Tii Tete

トトotoの同く父を意味し、又東北方言にヒト、Hito (人) をフト、Futo と訛る等にて其一斑を窺ふべければシラス等の「シ」と鳥のス。(巢)と同義なりと考ふるも決して牽強附會ではない。其他我大八洲國のシマ(島)も亦シムShimu (土島) ヌムSunu (住む) シマShima (島)と轉用せられたるに過ぎないことは既に先哲の説かれた通りである。

之を要するに「シラス」の語源は一定の場所を占め之に坐り之を所有するの意が擴張轉用せられて支配の義となつたのである。神代紀一書に伊弉諾尊勅任三子二曰、天照大神可<sub>ニ</sub>以治<sub>ニ</sub>高天原<sub>一也</sub>、月讀尊者可<sub>ニ</sub>以治<sub>ニ</sub>滄海原潮之八百重<sub>一也</sub>、素盞鳴尊者可<sub>ニ</sub>以治<sub>ニ</sub>天下<sub>一也</sub>とあるも畢竟天照大神は高天原に御して之を支配し給ふべく餘神亦之に準し給ふべきの義にして場所にかゝる辭なれば、三神御共に皆治の語を用ゐてある。

既にかく「シ」(Shi)の語原明瞭すれば、之を通用して種々語意を闡明し從來の疑團を氷釋し得可きと同時に、益々此解釋の正當にして事實に矛盾せざることが分明するのである。因て傍證として數例を試みる。

(一)「シロ」(城)のシShiも亦前陳と同義にして城主が此に敷き坐し占有支配せる住家即ち巢を意味し、ロRoは畢竟接尾語に過ぎない。附て言ふが上代に於ては城を單に「シ」(Ki)とのみらひて「シロ」と云はなかつたとの説あるも、「山背」國を「山城」國と改字せしめられたる事實より見れば、少くとも

平安朝の始めに於て既に「城」を「シロ」と稱せし事明にて、從てこれより上代にも恐らくは之を「シロ」  
 又「キ」と併稱したものと思はる。而して更に一步を進めて「キ」とは何ぞやと謂ふに、これは下の表  
 の如く「カキ」(垣)「カキネ」(垣根)の「キ」及び其母音 I の U に轉音せる「クネ」「クニ」「國」の  
 「ク」と同義にして一定の區域を意味し、從て城廓をもさすこととなつたの  
 である。而してカ (Ka) は接頭辭 (Prefix) に過ぎずして、Kine, Kune, Kuni  
 も亦唯母音を變せる同語たるは説明を須たない。亦之も勿論接尾語に過ぎな  
 べし。

(二) 「苗代」も亦同理によりて苗の座所即ち苗の巢なり。

(三) 「坐る」の Su も亦 Shi の母音の一轉のみにて他部は其接尾語に過ぎなごころ「代はる」の Wa に  
 同じ。即ちそこを占め敷くの義である。

(四) 「代」(Shiro) 即代價は場所を動かして他のものを以て之を占めしむる義にして、英語の in place of  
 instead of に相當する。

次に「ウシハク」の語義に及ばんに、其「シラス」と同意にして其間に決して尊卑大小正閏王霸の別な  
 きは既に他の諸君の用例によりて明白なれば、此には直ちに進みて此語本來の眞義を究めて更に兩語の間  
 に軒輊あるにあらざるを證明ませう。



Shiro) の形は Ushinaku の キハ Wuru 及び Siasu は Wirusu に相當す。然るに Wirusu といふ語はかたは Siasu なる語が Saseru に轉せる如く、Wasu 或は Wushi に轉せられたるためであらう。之を傍證する例は「ニル」Niru (似る) の語根は Ni なるに、「ニラス」Nirasu なる語は存せずして、「ナラス」Naras (均平にする一様にする) の語が其轉用の迹をあらはし居るが如きものである。

尙ほ古事記の久羅下那洲の「ナス」Nasu は Niru と同語根なれども今死語となりて用ゐられざるを參看無かりしをちんかしてなる。

これば Wuru が Wisu となり Wosu となり Wishi なる如く今此内現存せざる語ありども、上代にも亦輕斷することが出来ないは言ふまでもなし。

又ミル Miru ミス Misu (見) メス Mesu 等の相轉する如く Wīru Wu-su (ヤミ大人) Wu-shi (ヨサ長) Wo-sa (ヤミ食ヌ) Wo-sa も亦同様である。之を要するに

ウシ (W) ushi — 語根 ハク 接尾辭 ヲ Wu — 語根 Shi 接尾辭 キミ 〓 居語根のみならば  
場所 — Shi 〓 (Shitsu) の shi に同じ

即ち「ウシハク」の場合に於ても亦場所を占領するを意味し、從て支配する義をも帶ぶるに至りしものなれば、畢竟「シラス」と同一義に歸し、兩語間の義に王霸正閏の別を認むることが出来ない。

終りに臨んでたとひ結論に於ては安藤君の説と合せざるものあるも、之より多くの暗示を得たるを深く感謝し、併せて私の此論を御研究下さるゝ方は是非同君の高説を參照せられんことを望みます。何故ならば既にこれに見えたる例證を引くことを避け私は此に簡單に自説のみをのぶるに止めたからです。